

下境の長坂を越すと、国見と川戸に分かれる峠があつてな。その峠の話だ。

むかし昔、お天とうさまが、かんかんと照りつける暑い夏の日の事だった。一人のお百姓さんが峠にさしかかるとな、かすかに人のうなり声が聞こえてきたと。

「はてな」

と、思い立ち止まり、辺りを見ると、草むらの中に人が倒れておった。近づいてよく見ると、旅の坊さまでもあるうか、衣は汚れボロボロでな。

「これ、どうなすった、すっかりしなせえ」

すると坊さまは少し口を開き、何かを話そうとしたと、だが声にはなんねえ。が、転がっているからっぽの竹筒に、ゆっくり目をやった。

「ああ水が、水が飲みてえんだな」

そう言うとお百姓さんは、夢中で「ふもとへ駆け下りて行った。

そうして、やっと汲んで来た冷てえ沢の水を、坊さまの口元にひと口、またひと口流し込んでやったと。坊さまは喉を鳴らしながら飲んだ。

すると、坊さまはだんだん元氣になつて、歩けるまでになつたと。

「坊さま、えがったな、えがった」

元氣になつた坊さまは、お百姓さんに何度も何度も頭を下げて、どこへともなく去つて行ったと。

何日か過ぎて、お百姓さんが峠の道まで来るとな、坊さまが倒れていた所から、なんと、きれいな水がこんこんと、湧き出ているんだと。

「あれー、水が」

不思議に思つたお百姓さんは、村の人たちに坊さまのことを話したと。

「それはきつと、国中を旅している弘法大師様にちげえねえ」

と、村の人たちは、口々に言いあつたと。

そんなことから、この水を誰からともなく、「弘法水」と呼ぶようになったと。

そして、村の人たちは、水が湧き出た所の上の山にお堂を建て、石に弘法大師様のお姿を刻み、ていねいにお祀りしたんだと。

そんな お話し

おしまい

(鳥山の民話より)

ひとロメモ

今でも水は涸れる事なく、湧き出ています。水不足が続くと、村の人たちは、このお宮にお参りして水をもらって帰り、雨乞いをするという事です